



## 大樽の滝 —越知町十景—

「大樽の滝」は、『日本名瀑百選』(または『日本の滝百選』:平成2年指定)の一つに数えられる県下屈指の名瀑である。落差:34<sup>m</sup>で、標高225mという低い場所にあるのを特徴とする。かつては、県下でも観光の名所として知られていたらしく、『越知町十景』の一つに入っていて、地元の商店が発行した絵葉書にもなっている。当時は、売店を含む3、4棟ほどの建物があり、観光客の訪れるシーズンには開店して賑わっていたようである。現在は「横倉山県立自然公園」の一部に指定されていて、春の新緑、秋の紅葉が美しい。世界的な植物学者・牧野富太郎博士も越知に来た際〔昭和9(1934)年8月2日(?) ; 博士73歳の時の横倉山での植物採取会指導〕ここを訪れている〔写真〕。

滝の本体は、地質学的には「三滝花崗岩」と呼ばれる4億年以上も前の古い花崗岩からできている。坂折川を挟んだ北方の横倉山にもこれと同じ花崗岩が分布しているが、横倉山の東西方向への延長のものではなく、南側の列に属するものである。高知県では、この種の4億年前の格段年代の古い異質的な地層・岩類が分布する地帯が蛇紋岩を伴

う大断層に沿ってほぼ東西方向に延々と続いており、「黒瀬川構造帯」と呼ばれている。黒瀬川構造帯は、場所によって北、中、南側と三列〔N, M, S帯〕に分かれて分布している。横倉山はN帯に、大樽の滝はM帯に属している。M帯には、横倉山のようなシルル-デボン紀の地層はほとんど伴わないが、その代わりに、より高い温度・圧力を受けた高度の変成岩類が分布している。大樽の滝公園の駐車場から遊歩道を歩いて最初の坂道を登った所の河床に、ガーネット(ザクロ石:1月の誕生石)を含む「角閃岩」と呼ばれるやはり4億年以上も前の変成岩が見られるが、これと同様のものが、これよりも東の佐川町馬ノ原や、さらにその東の日高村妹背などでも見られる。ちなみに、大樽の滝の西側への延長部に当たると考えられる岩石が栃ノ木の手前の中峰地区に分布している。

この4億年前の「角閃岩」は、高知城のある大高坂山をも形成しており、従って、高知城は全国でも屈指(恐らく日本一)の古い岩盤の上になっていることになる。

大樽の滝  
(前列中央の蝶ネクタイ姿の人物が牧野博士)

## 横倉山の「ヨコグラノキ」

大 倉 浩 典

「ヨコグラノキ」は、牧野富太郎博士が高知県越知町横倉山で発見、明治31年『植物学雑誌』12巻で、横倉山と愛媛県西部の標本で新種として発表した横倉山を代表する植物の一つです。「ヨコグラノキ」とはどのような植物か、『牧野・新日本植物図鑑』の「ヨコグラノキ」の解説(376頁)を紹介すると次のようになります。

「1503 よこぐらのき〔くろうめもどき科〕  
(学名省略)

東北地方の中部以南、四国、九州、南朝鮮、支那中部地方の山地に産する落葉高木、溪谷やげに孤立的にはえる。高さ3~7mに達し、全株無毛、枝は暗赤かっ色でことに伸びた勢のよい枝では赤味が強くまた皮目が目立つ。葉はいわゆるコクサギ形葉序、すなわち枝の各側に2枚ずつ組んで互生し、有柄で紙質、長楕円形、長さ10cmほど、先端は鋭くとがり、基部は鈍形または鋭形、全縁で多少波状をなし、上面は濃緑色で少し青味のある光沢があり、下面は白っぽくまた下面脈上に少し細かい毛がある。花序は狭長で上方の葉腋から出て直立し淡緑色の小花が集合して着く。がく片



よりも短い。雄しべは5本で花糸は短い。雌しべは1本、花柱は短かく、先端は僅かに2分する。核果は長楕円形、鈍頭で長さ6~7mm、黄色からだいたい赤色となり最後に暗赤色となる。高知県

横倉山に著者(牧野)が最初に採集し、初めはその山の特産と思われたのでその名を付けたが、後に産地は方々で見付かった。……」とあります。

「ヨコグラノキ」を新種として発表するための基準標本を採集した(記録によると明治17年8月)貴重な原木は、124年たった現在でも健在です。場所は横倉山山頂付近にある通称「馬鹿試し<sup>ばかだめ</sup>」と呼ばれる石灰岩の断崖の上に立つ横倉宮(旧御嶽神社:祭神安徳天皇)の社殿に向かって右側の岩場で、石灰岩の割目の痩せ地に風雪に耐えしがみつくように根を下ろしています。幹周り165cmで、根元から30cmと70cmの所に大きなコブ(腫瘍)が幹を取巻き、更に根元から2mまでの樹幹は内部が腐朽して空洞となり、サルノコシカケも着生しています。普通ヨコグラノキは直通で上部で枝を出しますが、この「ヨコグラノキの原木」は根元から3mの所で2本に分岐、そのうち1本は更に分岐して3本の大枝が四方に枝を伸ばし、毎年沢山の花を咲かせ実をつけておりました。しかしながら、2004年8月30日の台風16号の直撃で大枝3本とも途中から強風で吹き飛ばされ、貴重な原木もこれで最後かと心配しましたが、枝が折れたことで根に対する負担が軽減されたのか、台風以前よりも元気になったようにも思われます。

このような基準標本を採集した原木が現存するのは極めて希なことで貴重な存在だと思われませんが、この原木は発見から124年間、『越知町指定文化財(天然記念物)』にはなっているものの、県の天然記念物や文化財として指定されることもなく、ただ『植物学博士<sup>※</sup>故牧野富太郎 発見命名「横倉の木」』と書かれた根元の腐った標柱が立て掛けられているだけです。ちなみに、宮城県白石市小原の阿武隈川支流、白石川右岸の虎岩の北斜面で発見された「ヨコグラノキ」は、北限地というだけで先の第二次世界大戦の最中の昭和17年10月14日に国の天然記念物の指定を受け、周囲を金網の



柵で囲み大切に保護されておるようです。

昭和46年高知県発行の『土佐の名木』の中の「高知県名木一覧」によると、当時県内の「ヨコグラノキ」では、第1位が香美郡物部村押谷の「槇尾のヨコグラノキ」で、幹周り160cm・樹高15m、第2位が高岡郡越知町の

「横倉山のヨコグラノキ」で、恐らく原木のことと思われませんが、幹周り1.0m・樹高8mとあります。なお、「槇尾のヨコグラノキ」はその後間もなく枯死しましたが、「横倉山のヨコグラノキ」はその後も健在で37年間で幹周りも65cm大きくなり、当時の「槇尾のヨコグラノキ」の幹周りを越しており、そろそろ寿命も近いと思われます。

そこで「ヨコグラノキの原木」の樹齢を推定してみると、標本を採集したのが1884年でその当時の樹高が2m前後と言われており、あの環境の悪い岩場で2mまで生長し花が咲き、結実するまでには少なくとも30年はかかるとすれば、(2008年-1884年)+30年=154年となります。

最近の調査では、県内で「ヨコグラノキ」は宿毛・大正・窪川・須崎・吾川・大川・本山・南国・物部など各地で確認されておりますが、本家横倉山に「ヨコグラノキ」が何本位あるかということとはっきりしておりません。例えば古い記録では、植物研究家・山脇哲臣先生が昭和29年に出版された『土佐植物風土記』の中には「ヨコグラノキは同山(横倉山)にはただ1本しか見えませんが、香美郡西川村猫獄平家森には沢山生じています。」とあり、また「山と野原の会」の著書の中には「樹

林に覆われた稜線の道を東の兜嶽に向かう。所々にヨコグラノキが見える。…」とあります。その他現在の「ヨコグラノキの原木」の少し下の方にもう1本ヨコグラノキがあることはよく知られており、昔地元越知町で牧野富太郎博士の協力者であった織田千歳氏(ヨコグラツクバネの発見者)は、「ヨコグラノキの原木」の親木が空池(「馬鹿試し」西方の石灰岩地:小ドリーネ)にあると言っておられたという話もあります。

今回、横倉山の植物調査と並行し、遊歩道沿いで見える範囲でヨコグラノキの調査をした所、空池周辺から住吉までで16本、馬鹿試し周辺上下で14本、南遊歩道(「四国のみち」)の青スタから三角点(774.3m)の間で6本、三角点から眺望所周辺で10本、屏風岩から夫婦杉までに4本、第3駐車場の下で2本、合計52本の「ヨコグラノキ」が確認でき、そのうち幹周り1.0m以上のものが原木を含めて8本です。ちなみに第3駐車場の下で2本は、林道に車を止めて歩いて1~2分の所で、どうしても横倉山で「ヨコグラノキ」を見たいという人には最適ではないかと思われます。なお横倉山麓の横倉山自然の森博物館の入口でも、苗木から育てた「ヨコグラノキ」が2.0m程に生長し昨年から花を咲かせ実をつけ始めました。

※正しくは「植物学者」もしくは「理学博士」。

(おおくら こうすけ/元高知中央高等学校教頭)



〔写真撮影:恒石直和氏〕

# 仁淀川の過去と現在 —仁淀川はどのようにしてできたか— その1

満 塩 大 洗

## はじめに

「仁淀川」は、高知県の三大河川の一つで、“日本最後の清流”といわれる四万十川と並び、清流を誇る河川として有名ですが、「淀」と言う名前の付いた川が全国に何本あるかご存知でしょうか。1番目は、豊臣秀吉の側室である「淀の御方」に由来する大阪の「淀川」。2番目は、「淀川」より大きい宮崎県の「大淀川」。そして、3番目が、私たちの住む高知県の「仁淀川」です。名前の由来については諸説ありますが、昔偉いお坊さんが「淀川」に似ていることからそう名付けたとも言われています。

さて、ここではどのようにして仁淀川ができたのかについて、ドラえもん“どこでもドア”か“タイムフロシキ”でワープしてみましょう。ちなみに、“どこでもドア”の数学的根拠は既に明かにされています（満塩・新関；2000）。

その前にまず、四国の一般的な説明から致しましょう。

## 四国の地質と河川の全体像

四国全体の河川系は、ほぼ東西に流れているの

が主流です〔図1〕。例えば、四国最大の吉野川の上流域は高知県に属し、県北部地域をほぼ東西に流れています。しかし、よく見ると、南北方向の河川も付随的に存在しています。これには、地質が大いに関係しています。

四国の地質については、地形と同様に、ほぼ東西方向に延びる地質帯が南北に帯状に配列する構造で特徴付けられています。そして、各地質帯の境界は構造線と呼ばれる大きな断層線によって境されています。すなわち、一番北にあるのが、中央構造線によって大きく分けられる西南日本内帯の領家帯です。その南の外帯では、これに接して三波川帯・御荷鉾帯、そして、その南側に“御荷鉾構造線”と接して秩父累帯、さらにその南に仏像構造線に境されて、四万十帯が配列しています〔図2〕。

## 仁淀川

高知県には、国の直轄の一級河川が4本あります。このうち、吉野川中・下流以外は高知県内にあり、西から四万十川、中央部の仁淀川、東の物部川の順で流れています。高知県管轄の二級河川とともにその分布を示すと〔図3〕のようになります。



図1 四国の河川系

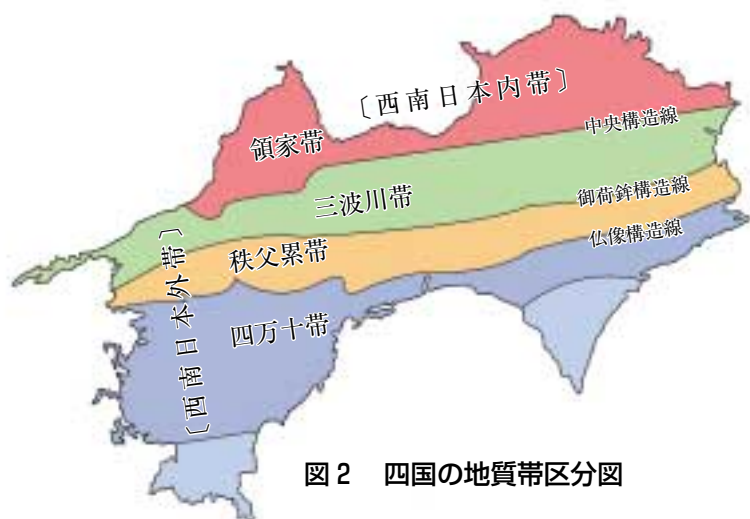


図2 四国の地質帯区分図

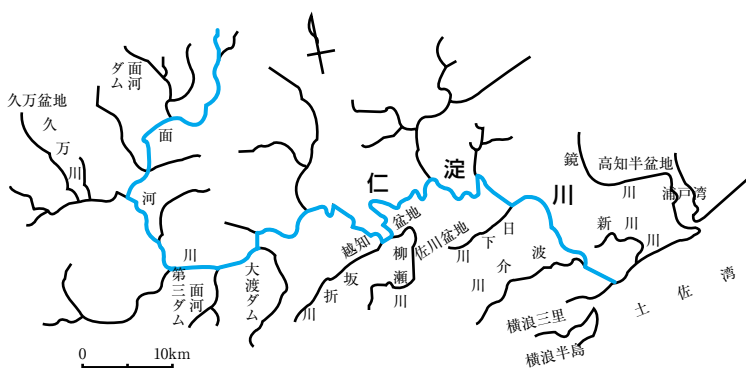


図3 仁淀川水系

さてそれでは、本題の越知町に関係の深い仁淀川について説明することにしましょう。

仁淀川は、愛媛県の石鎚山系の面河付近に源を發し、ほぼ南東方向に流路をとりながら高知県内を流れ、土佐湾に注いでいます。本流の延長は124km、流域面積は150km<sup>2</sup>、流入する支流は164本もあります。源流域を経て、御荷鉾帯・秩父累帯・四万十帯の4つの異なる地質帯をほぼ斜断するように流れているため、種類・年代・色相の異なる実にさまざまな岩石によって河原が埋められています。上流部は溪谷を成し、流域は昔から風光明媚でしたが、大渡ダムができてからはその水量は著しく減少し、以前は岸辺の岩場の至る所でたくさん咲いていた、牧野富太郎博士の発見・命名の「キシツツジ」もめっきり少なくなりました。

流域の地形・地質の概要

仁淀川の河川断面図をおおざっぱに見ると〔図4〕のようになります。地形については、山地・丘陵・平野の他に、高知市内の高知半盆地で見られる段丘群などがあります。海岸付近の地形は、断崖と

砂丘（本当は砂礫の連なった砂礫嘴）及び砂礫浜が見られます。種崎や春野方面では砂礫嘴が顕著です。

一方、流域の地質は、前述のように、三波川帯・御荷鉾帯・秩父累帯及び四万十帯に属し、従って、これら地質帯に属する各種の岩石類を供給するほか、流域にそれぞれの時代の地形、すなわち、山地・丘陵・段丘・平地などが存在しています。このうち山地は新生代の第四紀と呼ばれる時代以前の地質系統から成り、丘陵・段丘・平地は、それ以降の地質系統からできています。

ここでは、第四紀という“人類紀”の約200万年以降の地形や地質を検討します。この時代は、氷河期とその間の間氷期によって特徴付けられています。これら、氷河期・間氷期の繰り返しのよって段丘などが形成されました。つまり、氷河期は寒冷などで地球の両極が氷河の発達によって拡大し、その結果海退が起こります。逆に、間氷期には地球が温暖化し氷河が溶けて海水が増加し、海水面が上昇します。そこで、海水が陸域に侵入し、陸域が狭まる「海進」と呼ばれる現象が起こります。このような、氷河に関する海水面の変動を特に「氷河制海水準変動」と呼んでいます。もちろん、海水準の変動には、この他に地震や津波などによる急激な変化や、地盤変動（エパイロジェニシス）と呼ばれる緩やかな変動もあります。

これらの変動によって海水準が変化すれば、当

これらの変動によって海水準が変化すれば、当

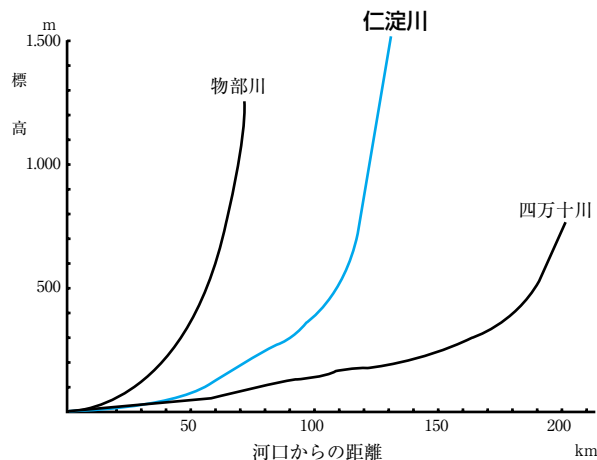


図4 高知県の河川の河床断面図

然のことながら河川などが河床や流域の岩盤を削っている浸食の基準面が変化します。これらの原因によって、流域には河岸段丘など各種の地形が形成されるわけで、地形的に高いものほど古いということになります。

越知町周辺には時代の異なる河岸段丘が何段か形成されており、越知市街地自体も大規模な河岸段丘の上に発達しています。段丘の種類で言うと「低位段丘」に当り、今から約2 - 1万年前に形成されたものです。これより古いものでは、標高80 - 100m付近に見られる「中位段丘」〔約14 - 2万年前〕、そして、110m付近の「高位段丘」〔約80 - 14万年前〕などが残っています。この中で特に、小舟峠おぶねを佐川方面に越した所（標高70 - 75m）に高位段丘の段丘礫層が見られることから、かつて

仁淀川はここを越して東へ流れていたことがわかります。さらに、下流域では、いの町のJR鉄橋から東流し、高知市の鏡川に流れていました。

仁淀川さかのぼの歴史は、四国山地が形成された約200万年前に遡ることができます。すなわち、それまで北方向に向かって移動していたフィリピン海プレートが、この頃を境に北西方向に向きを変え、四国に直角方向に沈み込むようになり、土地の隆起が急速に始まって四国山地が形成されるようになりました。その結果、山地の侵食が始まり、徐々に仁淀川が形成されていったのです。

では、仁淀川がどのような歴史を経て、今日のような流路・形をとるようになったのでしょうか。これについては、次号でお話したいと思います。

（みつお たいこう/NPO法人 青い地球理事長・高知大学名誉教授）

## 博物館ニュース

### 企画展：『月影の森』

〔2007年9月22日（土）～11月4日（日）〕



博物館の開館10周年を記念する企画展として、“芸術の秋”であり、日本唯一とも言われる“アカガシ原生林”の残る横倉山にふさわしい「森」（原生林）をテーマに撮影・活躍

している高知市出身の写真家・高橋宣之氏の写真展を開催。今回は、森と月が織り成すコラボレーション—月と森の融合—の作品約40点を展示。山の稜線にかかる月、月を背景に闇夜に浮かび上がる森など、月を通して森を“再発見”することもあり、同じ風景には二度と会えないので、“リターンマッチ”はなく正に真剣勝負、“一期一会”いちごいちえの世界であるという。そんな二度と出会うことのない、一瞬の光景・場面をとらえた写真の“瞬間の美”の世界に浸ってもらおう。

月は「花鳥風月」と言われるように古来日本人がよく愛し、画題にもしばしば取り上げられる対象物であり、月そのものの美しさもさることながら、“瞬間”をとらえた森との共演で一層両者が美しく引き立つ芸術性の高いものとなり、観る者を圧倒させ、中には二度訪れたお客さんも何人かいたほどである。

「どの写真もすばらしい！こういう写真見たことなかった」「高知にもこんなすばらしい写真家がいるとは驚きです」「月の美しさを改めて



感じました」「見た事の無い夜の風景に思わず感動しました。来て良かったと思います」「夜の美しさを知りました。すばらしい感動を有難うございました」「大自然のすばらしさに改めて感動」「自然は最高の芸術」などの感想があったが、総じて『感動』の一言に尽きる作品展であった。

### 企画展：『昔懐かしい越知町の写真・引礼展』ひきふだ

〔2007年12月15日（土）～2008年2月11日（月・祝）；協力：島崎誠（島崎歯科医院）、森下薬局、横川呉服店〕



3年前に開催し町民にとって関心の強かった『昔懐かしい越知町の写真展』のPart 2として企画。

今回は、明治から昭和にかけての越知町の古い町並みや建造物、風景・風俗を写した写真〔50点〕の他に「引礼」と呼ばれる100年前の明治時代の呉服店・米穀商・魚屋（仕出し屋）などが得意先に配った色鮮やかな錦絵の“チラシ”〔30点〕、それに、地元商店街の有志が“町の活性化”に繋がればという願いで製作した明治～大正時代の旧商店街の模型〔30分の1〕を加えて展示。

156軒もの多種多様の商店が軒を並べ、映画館・芝居小屋が複数あり賑やかだった時代、今以上に自然が豊かだった古き良き時代の懐かしい想いでに浸っていただくことができたと思う。特に、一般にはあまり馴染みのない色鮮や



かな「引札」の芸術性や珍しさが人気を呼んだようである。地域住民の関心と呼び、充分それに応えることができたという点では、地方の博物館の企画展としてはふ

【所蔵：島崎誠氏】 さわしいものであったと思う。

主な感想としては、「とにかく感動しました。よくぞ見に来ました」「古き懐かしい時代を思い起こし楽しみました」「越知町で生まれ育ち、今は佐川町にいますが懐かしく涙が出ました」「初めてこの様な引札を見ることが出来、感激しています」「祖父の店の引札もあり感無量でした」「珍しい古き良き時代の写真を見させて頂きました」「懐かしい写真がいっぱいあり充分に楽しませていただきました」「『懐かしい』の一言。明治・大正の町並み模型の労作に再び感激！」などがあった。

#### 『越知中学校 職業体験』

〔2008年1月21日(月)～25日(金)；生徒2名〕

昨年に引き続き、地元の中学2年生を「職業体験」に受け入れる。樹木調査(ネームプレート取り付けなど)、植

物標本作り、化石の酸処理・型取り・クリーニング、パソコンを使っての企画展のチラシ作りなどを行う。

「博物館の仕事は地道な作業ばかりで大変だったが、とてもやりがいのある仕事だと思った」、「たくさんの種類の仕事があって、博物館は“奥が深い場所”だと思った」という感想をもったようである。

#### 『横倉山自然の森博物館開館10周年記念共催イベント』

〔2008年3月2日(日)；共催(社)高知県森と緑の会；参加者：大人37名、小人4名〕

博物館の開館10周年を記念して、横倉山登山とセンダイヤザクラの植樹を行う。センダイヤザクラは牧野富太郎博士が郷里高知市内の商家・



仙台屋の庭で見つけたものを屋号にちなんで名付けたもので、正式名は「オオヤマザクラ」、別名エゾヤマザクラまたはベニヤマザクラと言う。この日は、博物館の敷地内に2本、横倉山第1駐車場の斜面に8本の計10本を植樹した。

## 友の会だより

#### 『三嶽古道のみちづくり一歩をたてよう！』

〔2007年11月23日(金・祝)；参加者：友の会会員9名、一般1名〕

去る9月に行った『秋の横倉山ハイキング』で歩いた三嶽古道が、もっと多くの登山客に自然を楽しみながら歩いてもらえるようにとの思いで「道しるべ」を立てることにした。



この日は、樹木のネームプレートも掛け、自然観察をしながら、道の歴史とその保護についても考えた。

#### 『オリジナルキャンドルと石鹸づくり教室』

〔2007年12月9日(日)；博物館3階展望ロビー、参加者：友の会会員9名、一般2名、講師：3名〕

廃油を使った、クリスマスに向けてのろうソクづくりと年末の大掃除に向けての石鹸づくりを行う。

各自気に入ったろうソクの容器のガラス瓶を持ち寄り、オリジナルなクリスマスキャンドルが出来あがった。

不用となった廃油を使っでのキャンドルづくりで、地球資源の再利用という観点において望ましい試みであった。



## 横倉山ミニ歳時記

### ■シイノトモシビタケ -発光キノコ-

自ら光を発する植物・「発光植物」には、担子菌類・鞭毛藻類・細菌類がある。このうち、最も大きい担子菌類は、有性生殖により担子胞子を作る菌類で、シイタケやマツタケを代表とする「キノコ」と呼ばれるものに多い。キノコの中で発光するものとしては、「ツキヨタケ(月夜茸)」が有名であるが、「シイノトモシビタケ」も発光することで知られる。前者が、傘は半円形で直径10～20㌢と大きいのに対し、後者は、ドーム状で直径1㌢足らずと極めて小型であるにも拘わらず、発光量は前者よりもはるかに大きい。

写真は、横倉山のブナ科の植物(アカガシ?)の倒木に数個体着生していたものを撮影したものである。一見海のクラゲのようにも見えて、幻想的で実に面白い。横倉山には「アカガシの原生林」が見られ、カシやシイ類が多いので、今後まだまだこの種の“発光キノコ”が見つかるかもしれない。



〔撮影：高橋宣之氏〕

## 〔平成20年度博物館行事予定〕

- 平成19年12月22日(土) 博物館協議会
- 平成20年1月21日(月)～25日(金) 越知中学校職業体験
- 3月2日(日)

横倉山自然の森博物館開館10周年記念共催イベント  
—『横倉山探訪』

○3月1日(土)～4月13日(日)

春休み企画展：『横浪半島の自然』

●3月17日(月) 博物館協議会

○4月19日(土)～5月11日(日)

企画展：『米寿記念 藤原花子 染織展  
—おばあちゃんの手仕事—』

※期間中機織の実演

○4月27日(日) 春の横倉山散歩

○6月26日(木)～7月6日(日) 『高知県写真家協会 写真展』

○7月19日(土)～9月15日(月・祝)

夏休み企画展：『昭和のレトロ展』

※期間中昔ながらの機織を使っの「かき氷」と「ボン菓子」の実演販売

○7月27日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕

○8月3日(日) 夏休み博物館教室〔植物〕

○8月17日(日) 夏休み博物館教室〔工作〕

○8月24日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕

○9月27日(土)～11月3日(月・祝)

企画展：『自選展—野並允温の世界—』

※期間中絵画教室開催

○12月13日(土)～2月15日(日)

企画展：『川添 晃 水彩画展—土佐日記の世界—』(仮称)

## 〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成20年度活動予定〕

●平成19年11月18日(日)、23日(金)

三嶽古道のみちづくり—道しるべをたてよう！

●12月9日(日) 炭焼き体験

●12月9日(日) オリジナルキャンドルと石鹸づくり教室

●12月23日(日) 炭焼き体験

●平成20年1月1日(火)

2008年の初日の出を横倉山で(天候不良で中止)

●1月19日(土) 炭焼きと燻製

●2月1日(木) スターウォッチング—冬の天の川・すばる—

●2月9日(土) 炭焼きと燻製をつくってみよう！

●3月1日(土) 炭焼き体験

○3月 ヨコグラックバネを絶滅から守ろう！

○5月4日(日) 「呈茶」(3階テラス)

○5月11日(日) 白髪山植物観察

○5月 友の会総会

○6月 仁淀川水質調査〔身近な水環境の全国一斉調査〕

○6月 炭焼き体験

○6月 横倉山ヒメボタル観察会(杉原神社)

○8月 スターウォッチング4—夏の天の川・こと座—

○9月 秋の横倉山ハイキング

○10月 視察研修〔1泊2日〕

○12月

## スタッフの声、声、声

〔西森〕 昨年12月15日(土)～2月11日(月・祝)まで企画展『昔懐かしい越知町の写真・引札展』が開催された。来館者からは、明治～大正期の旧越知商店街の模型を見て、「この模型はようできちゅう。引札ってこんなにきれいやったが」等々皆様方に懐かしく、楽しんで頂けた。

この模型は、県から派遣された「元気応援団」の大野さんの発案で、越知町の商店に眠っている“お宝”を発見しようと越知中学校生徒と指導者との「お宝探検隊」が、昔の古き良きものを商店主に尋ねた事がきっかけで、昔の町並みの模型を作ってみようという有志が数ヶ月かけて製作したもの。このような町内の身近なものを紹介する、地域と関わったものを企画し紹介してゆくことも博物館の大切な使命だと思います。

〔西川〕 桑敷のイベントで五在所山へ登りました。モミの木やアカガシの巨木に驚き、相撲場跡では当時のにぎやかだった様子を想像し、四国山脈が一望できる展望所では雄大な自然に感動と、五在所山が体感できた一日でした。その後の猪肉がまた格別。

〔安井〕 昨年は開館10周年の年にふさわしく、いろいろ想い出に残る企画展・イベントが開催でき、御協力戴いた方々に感謝の気持ちで一杯である。私自身の人生においても、い

ろんな面(どちらかと言えば悲しい方の)で“想い出”に残る年であった。年が改まり、十二支の最初の「子」の年となり、また新たなスタートが始まった。“ゼロからの再スタート”、“第二の人生のスタート”という気持ちで、公私共に“小さな存在”ではあるがベストを尽くし、さらに実りある年となることを願いたい。

〔小松〕 3月13日。博物館の傍でウグイスが鳴きました。姿は見えませんが、がんばっています。タゴガエルもワンワン鳴いています。ヤマアカガエルのオタマジャクシもちょろちょろ泳いでいます。ヒサカキの花の匂いに気がつきました。春ですね。くしゃみがとまりません。

〔伊藤〕 梅や菜の花が咲き、春らしくなってきました。最近日は落ちるのが遅くなり、犬と散歩するときにライトが要らなくなってきました。犬も楽しそうです。散歩中のデジカメでの撮影もまた再開しました。もう少ししたらまた「ハヤ釣り」をしたいと思います。

〔小野〕 花粉の季節となりました。テレビで花粉が飛んでいる場面を見るだけで鼻がムズムズしてきます。この時期はなるべく外出したくないですが、暖かくなり山々も色付く季節。桜とお酒に誘われてマスクをお供に出ることにします。

高知県越知町立

横倉山  
自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12  
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620  
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで  
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)  
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)  
小・中学生……………200円
- 越知への交通  
高知 — JR特急 約30分 — 佐川 — バス 約15分 — 越知  
JR普通 約50分

